

「見沼代用水に関する古文書を読む」解説編

1 見沼代用水について

享保 13 年（1728）に井澤弥惣兵衛為永の指揮の下で見沼代用水が整備され、見沼や周辺の沼などで新田開発が行われた結果、各地で新田が造成された。見沼代用水路の本流はもとより、分岐して設けられた用水路は、現在のさいたま市域を含む広域の田に用水を運んでいた。このような用水路は江戸時代に作成された絵図類の中でも描かれており、地域にとって重要で身近な存在だったことが窺える。

見沼代用水は春から夏にかけて利用された。用水管理は広域的な問題であり、幕府の四川用水方によって行われていた。また用水路及び水利構造物の維持・管理・修繕等は、四川用水方による管理の下で、用水を利用する村々によって行われていた。

2 用水管理

用水の管理は、幕府勘定奉行配下の大川通御普請役、延享 3 年（1746）以降は改称して四川用水方が担当していた。見沼代用水は広範囲にわたって利用されており、特に下流域では水不足に陥ることが多く、広域的な用水管理が必要であった。

新田の用水利用のために、毎年八十八夜から 210 日間を目途に利根川から取水する「元塚」と「増塚」を開閉して、代用水路に通水していた。用水を利用する村々は用水利用が終了した段階で「用水不用証文」を四川用水方に提出することになっていた。

3 参考文献

『見沼代用水沿革史』（見沼代用水土地改良区、1957 年）

青木義脩『井澤弥惣兵衛為永 見沼新田開発指導者その人と事績』（野外調査研究所、2015 年）

さいたま市立博物館『第 43 回特別展「見沼 ～水と人の交流史～」図録』（2019 年）

